

原 著

## セクシュアル・マイノリティに対する

### 大学生の意識と態度：第1報

—インターネットを活用した調査研究—

昭和大学富士吉田教育部

須長 史生\* 小 倉 浩

堀川 浩之 倉田 知光

昭和大学富士吉田教育部カウンセラー

正木 啓子

抄録：本研究の目的は18歳から20代前半の男女の、セクシュアル・マイノリティに対する意識や態度を明らかにすることである。目的を達成するために、首都圏の医療系のA大学の1年生439名（男性137名、女性300名、その他2名）に対してアンケート調査を行った。本調査はその性質上、プライバシーの確保と回収率の向上が課題となる。そこで、今回はその双方への効果を期待して、手段としてインターネットを活用することとした。学生はスマートフォンもしくはタブレット端末を用いてアンケートに回答した（回収率76.9%）。質問紙の作成およびデータの分析では先行研究として釜野さおりらが行った「性的マイノリティについての全国調査（2016年）」の報告会資料を参考にし、その比較において若者、特に今回は18歳から20代前半まで大学生の、性的少数者に対する意識や行動の実情の把握を試みた。調査の結果、調査対象者の持つセクシュアル・マイノリティに関する客観的知識は「全国調査」が明らかにした一般的な傾向に比べてより正確であることが分かった。また、セクシュアル・マイノリティに対する意識や態度も差別的な内容を含む項目では、より抑制しようとする傾向を示した。これらのことは本調査の対象者が「全国調査」に比べて高学歴かつ医療系という独自性を有していることが関係している可能性がある。それゆえこの結果は社会の全体像をそのまま映し出したものとは言えないが、医療に関する知識がより広範に普及するであろう将来の社会像の一端を予見させるものとしての価値は有しているといえよう。なお、本研究は3か年に渡って毎年同大学の1年生に対する調査が予定されており、その1年目の中間報告に位置づけられる。

キーワード：セクシュアル・マイノリティ、客観的知識、性的偏見

#### 緒 言

本研究の目的は10代後半から20代前半の学生のセクシュアル・マイノリティに対する意識や態度を実証的に明らかにすることである。

われわれの社会では多数派の異性愛を意味するヘテロセクシュアル以外のセクシュアリティについては、さまざまな呼称が用いられているが、本研究においては性的少数者を意味するセクシュアル・マイノリティという語を用いる。とりわけ近年ではレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェン

ダーの頭文字をとったLGBTという語が急速に浸透し、表現として市民権を得た感がある。調査対象となる10代後半から20代前半の若者層でもこの語は好んで用いられ、「先生、僕はLGBTのGです」のように深刻にならずに自らのセクシュアリティを表現できることを助けるなど、その効果も見られるようになってきている。しかし、この語には特定のセクシュアリティのみを指し、それがセクシュアル・マイノリティ全体を代表するかのような誤解を与えかねないことへの懸念や、恋愛を前提としたセクシュアリティのみを抽出して恋愛を志向しないそ

\*責任著者

れを排除しているといった批判も見られる。セクシュアル・マイノリティ研究がその研究対象の中の少数派をさらに排除するのは望ましいことではない。そこで本研究では文脈上特に必要性がない場合はセクシュアル・マイノリティという語を用い、性的少数者すなわち異性愛以外のセクシュアリティを意味するものとする。

ところで、このセクシュアル・マイノリティに対する昨今の認知の広がりには目覚ましいものがある。ほんの数年前までは学生に対し「LGBT」の意味を問うても誰一人として答えられる者がいない状況だったが、今では一般向けのバラエティ番組のなかですらその語はしばしば登場し、いわゆる「オネエ」と称されるタレントが必ず出演者の一角を占めるまでに至っている。もちろんそれ以前からセクシュアル・マイノリティのタレントは存在していた。しかし、彼らに対して一般の人が抱くであろう違和感は以前ほどは強調されなくなってきたように見受けられる。すなわち「特別な存在」としてではなく、多様な出演者の一人として認識されるようになってきているのである。その意味で現在はセクシュアル・マイノリティに対する認知が広まり関心が高まっているとはいえよう。

他方、このことはそのままセクシュアル・マイノリティに対する偏見や差別の除去につながっているとはいえない。上記バラエティ番組では、そしてわれわれの日常でも、同性同士（特に男性同士）の抱擁や口づけは笑いの「ネタ」としてしばしば登場し、そして必ず驚愕や悲鳴が伴う。同性愛を示す独特のしぐさや「変な趣味」といった隠喩も相変わらず健在である。セクシュアル・マイノリティに対する認知が広がることは、一方でその実情を知りやすくはなるが、他方でそれそのまま偏見の解消へ直結しているわけではない。

するとここに一つ懸念が生じる。われわれは自由・平等を基本理念とする近代社会を生きている。差別が悪いことであるのは子どもでも知っていることだ。当然セクシュアル・マイノリティを差別してはいけないので、差別意識はかつてのようにはあからさまには表明されない。しかし、セクシュアル・マイノリティに対する偏見がなくなっているわけではない。だとすると、それは従来の偏見はそのままにその差別的な態度だけが隠蔽されるということを意

味することになる。表向きは「みんな平等です」「LGBTを差別してはいけません」と謳いながら、裏に回ると「気持ち悪い」と蔑み、笑いのネタにして盛り上がるのだ。そこではセクシュアル・マイノリティが一人も存在しないかのように「異性愛ワールド」が展開され、「ここだけの話」という前置きが免罪符となり、差別的な言動がまかり通る。彼らは、あるいは根は善人なのかもしれない。セクシュアル・マイノリティがいることが分かれば、きっとそのような差別的な振る舞いを控えるのだろう。しかし、それはあくまでも封印であり隠蔽であり、問題の解消ではない。異性愛を前提とした男女の二元論で社会制度を構成してきたわれわれの社会は、その根本で問題点を指摘され、その見直しが求められている。その有名な例として、いわゆる「トランス・ジェンダーのトイレ問題」があげられる。これはトランス・ジェンダーの人が公衆トイレを使用する場合、その基準は本来の戸籍上の性別か、それとも現在の性自認かをめぐる議論で、それは従来の男女の二元論では対応が不可能な問題の象徴としてしばしば取り上げられる<sup>1,2)</sup>。なお、この問題は公衆浴場や更衣室など男女別に構成された社会制度の多くに適用可能である。現在のわれわれの知るところではセクシュアル・マイノリティの人々は少数ではあるが一定の割合<sup>3,4)</sup>で存在しているのだ。

マイノリティに対して認知が広がり関心が高まることはもちろん望ましいことだ。しかしその関心のもたれ方にわれわれは注意を払う必要がある。本研究の目的はこのような問題意識に裏打ちされている。

本研究に供する一次資料収集のために、筆者らは「インターネットを活用したセクシュアル・マイノリティに関する学生の意識調査（以下、「セクシュアル・マイノリティ調査」）」を実施した。これは首都圏にある私立大学（以下、A大学）に通う一年生を対象にインターネットサイトを用いたアンケートによる意識調査である。この調査は2016年から18年までの3か年にわたって行われる。したがって本研究はその初年度の中間報告と位置づけられる。

## 研究方法

### 1. 調査概要

本調査が対象としたA大学は首都圏に所在する私立の医系総合大学である。学部構成は医学部、歯

学部、薬学部、そして看護リハビリ系の保健医療学部となっており、在校生のほぼ全員が医療系の職を目指している。また一年次のみ、全寮制教育を実施しており、学生は4人一部屋の相部屋で生活を送っている。

調査対象となる学生の専門領域が医療系のみで構成されていることは留意すべき点である。アンケート対象となった一年次では、専門的な学習はまだ入門レベルではあるが、医療系を志して入学した点で、生命や健康あるいはマイノリティに対してより好意的、共感的な側面に偏ることが想定されるからだ。学生のなかには入学試験に向けて「面接試験」や「小論文対策」として、類似テーマについてのトレーニングを受けている者も少なくない。このためデータの解釈に際しては特に生命倫理に対する感受性などに対して注意が必要となる。

またこの調査は、本研究に先立って釜野さおりが行った「性的マイノリティについての意識——2015年全国調査報告書（以下、全国調査）」<sup>5)</sup>の示唆を受けている。釜野らの全国調査では、セクシュアル・マイノリティに対する偏見の規定要因として、性別、客観的知識、そして年齢が重要な働きをしていることが指摘された。本研究では将来の社会を展望する若者に照準を絞り、その意識や態度の性差や客観的知識との関連などを明らかにし、その傾向を全国調査の結果との比較において把握することを目指している。釜野らの研究は2007年から当該テーマについて継続的に行われ、十分な学術的蓄積に基づいて2015年に全国調査が行われた。これは住民基本台帳による層化二段無作為抽出法により全国130地点から1,259票を回収した本格的な学術的価値を有する調査として評価されている。調査対象も20歳から79歳までの男女と幅広く、日本におけるセクシュアル・マイノリティの全体的な意識傾向をとらえたものとなっている。それゆえこの調査と比較することで、本調査が日本社会の全体的な傾向と比べてどのような位置に置かれるのか、そしてどのような特殊性を有しているのかが明確化しやすくなる。

上記目的を達するため、本調査ではその多くを全国調査と対応させている。質問は問1から問15までであるが、本調査の問1, 3, 4, 6, 7, 9, 11, 12は選択肢に「答えたくない」を加えるのみの最小限

の修正で全国調査と同じものを採用し、問10も設問の表現の「近所の人」を「知人」と本調査の性質に合わせた表現に変え、質問形式に若干の手を加えたうえで同じものを採用している。

なお、調査時点でのA大学の一年次の学生在籍数は571名（男子207名、女子364名）で、有効回答数は439（男子137、女子300、性別未回答2）であった。回収率は76.9%（男子66.1%、女子82.4%）である。

## 2. データ収集の方法

1) アンケート調査の概要およびデータ保持、管理について

本研究においては、特に改正個人情報保護法で定められる機微（センシティブ）情報を含む情報を調査対象者の同意のもとに収集し、その結果を研究の1次資料として使用するため、情報の取扱いについては最大限の配慮が求められる。本研究で情報を収集する際に使用した方法および情報管理方法について、以下で簡単に述べる。

### 2) 情報収集方法

本研究では、データ収集の効率と情報漏えいの危険度を十分に考慮したうえで、Webサイト上に表示されるアンケートに各個人が回答を記入する方法で、調査対象者の回答を収集した。以下、この方法の利点について列挙する。

まず、Webサイト上でアンケート回答を直接記入する方法を用いることにより、回答収集過程の自動化および収集したデータを表計算ファイル形式に変換する作業工程が自動化される。これは、情報管理責任者の負担を著しく軽減することにつながる。従来のように、回答を紙ベースで記入、回収する方法を使用する場合は、回答を表計算ソフトに入力する作業を情報管理責任者に依頼することになるため、本研究のように対象が数百名の規模である場合には、複数の情報管理者に依頼せざるをえない。これは、情報漏えいの危険性をできるだけ低減するという観点からも好ましくない。また、紙ベースの場合であれば回答収集にあたる補助的な協力者が必要になるが、Webアンケートへの回答であれば、こうした補助的な協力者が不要となる。この結果、回答の秘匿性がより高まり、これが対象者の安心感向上および回収率の向上につながることを期待できる。さらに、本研究ではWebサイトにスマート



フォン経由でアクセスし、スマートフォンから回答を入力してもらう方法を用いている。現在の大学生は、紙ベースでの回答記入よりもスマートフォンによる回答のほうが、操作の親和性はむしろ高く、これが回答率の向上につながる事が期待できる。

情報収集は、2016年10月24日第1時限～第4時限の人文社会系の必修科目授業終了後の休み時間に行った。実施にあたって、事前に(a)研究の主旨、(b)研究への協力が全くの自由意思であり、協力しない場合にそれによっていかなる不利益も被る可能性がないこと、(c)アンケートの回答は原則として個人が特定される可能性がない方法で収集されること、を配布した説明用紙に基づいて説明した。

### (1) 実施方法

アンケートの実施形態は以下の通りである。調査者は、説明用紙にアンケート回答用サイトのURLをQRコードに変換したものを印刷しておき、調査対象者（自由意思で研究に協力することを承認した学生）は各自のスマートフォンでQRコードを通じてアンケート回答用サイトにアクセスし、回答を記入した。URLはほぼランダムな記号文字列（17文字の文字長）から構成されるため、調査対象者以外のものが偶然にアンケート回答用サイトにアクセスする可能性はゼロとみなせる。

### (2) Web ページ作成および回収の方法

Web ページ作成および回答収集の方法は以下の通りである。アンケート用 Web ページの作成には、この研究用に取得した Google アカウントで作成した Google サイトを使用した。個人的に構築した Web サーバをインターネット上に公開する方法もちろん可能であるが、個人が構築、設定した Web サーバがクラック（サーバーへの不正侵入行為）されてしまう危険性と、Google サイトがクラックされる危険性を比較した場合には、Google サイトの方がより安全性が高いと判断した。また、Google サイト上で送信された調査対象者の回答は、Google ドキュメント上のスプレッドシート形式のファイルとして自動的に保存されるように設定した。

### 3) 回答収集後の情報管理

情報漏えいの危険性を可能な限り低くするため、情報収集終了後、情報管理責任者の日程が許す範囲ですみやかに不要な情報の除去を行った。その作業手順は以下のとおりである。

①情報管理責任者は、この研究用に取得した Google アカウントのパスワードを自分だけが知るパスワードに変更（共同研究者はこの時点でアンケート回答ファイルにアクセス不能となる）。同時に Google サイトの公開設定を非公開設定に切り替える。

②情報管理責任者は、回答ファイル（表計算ソフト形式ファイル）構成フィールドのうち、回答日時のフィールドを除去する（回答時間が含まれることによって、何時限目終了後に回答したかという不要な情報が残ることを避けるため）。

③情報管理責任者は、自由記述欄への自由記述文書の回答と記号回答とを、相互に照合可能な符号を付した後に2つのファイルに分離して、保存する。

④情報管理責任者はオリジナルの表計算ソフト形式回答ファイルおよび上記記号回答ファイル、自由記述ファイルの3つのファイルを、暗号化機能を備えた記憶媒体に保存後、Google ドキュメントから削除する。この際、Google ドキュメントのごみ箱からも完全に削除する。

⑤共同研究者は④で保存されたファイルの内、記号回答ファイル、自由記述ファイルのみを情報管理責任者から受け取り、暗号化機能を備えた外部記憶媒体に保存し、この2つのファイルを基に分析を実施する。

⑥情報管理責任者は、自分が設定した研究用 Google アカウントパスワードを共同研究者に通知する。これにより、共同研究者はアンケート用に作成した Google サイトの情報にアクセスできるようになる。Google ドキュメント上のオリジナル回答ファイルは手順④で削除済みであるため、情報管理責任者のみが保持することとなり、共同研究者はアクセス不能となる。

なお、この調査は昭和大学の「医学部における人を対象とする研究等に関する倫理委員会」における審査・承認（受付番号 2073、課題名「インターネットを活用したセクシュアル・マイノリティに関する学生の意識調査」）を得て行われた。

## 結 果

### 1. 単純集計

本節では、本調査の設問16項目のうち4項目（問13.「戸籍上の性別」、問14.「戸籍上の性別への違

和感」, 問 15. 「セクシュアリティ」, 問 16. 「所属する学部」) を除いた 12 項目において, これらをトピックごとにまとめ, 調査結果を掲載する. トピックは, 1. 「客観的知識」, 2. 「情報の取得と共有する相手」, 3. 「存在の認識」, 4. 「身近な人に対する嫌悪感」, 5. 「友人からのカミング・アウト」, 6. 「同性婚の見解」の 6 つとなる.

#### 1) 客観的知識

本調査では, セクシュアル・マイノリティに関する「客観的知識」について, 現状を把握するために問 5, 問 6, 問 7, 問 8 として 4 つの設問項目を設定した (具体的な設問の内容については添付資料を参照のこと).

正しい知識の習得率については, 問 5, 問 6, 問 7 にて聞いており, 問 5 については, 本調査独自の問題を設定し, 問 6, 問 7 については, 釜野さおりらにより全国調査において実施された設問を採用している. さらに, 本調査では, 問 8 として「あなたは, 同性愛, 性別を変えた方, 性同一性障害などについて正しい知識を身につけたいと思いますか」と, セクシュアル・マイノリティについて正しい知識を身に付けたいかという設問 1 つも加え, 学生の知識習得への意欲についても聞いている.

結果, 問 5 については, 「一度でも同性が好きになれば, 同性愛である」とする設問に対して, 13% が「正しい」とし, 41% が「正しくない」, 46% が「わからない」と回答している. この設問に対する正解は, 性愛の対象は変わり得ることや同性を好きになっても両性愛の可能性もあることなどから「正しくない」とする回答が正解であり, 本調査での正解率 41% から, 4 割程度が正しい知識を有していることが分かる.

問 6 では「日本では, 同性愛は精神病とされる」という社会的な事実に関する客観的知識を聞いてい

る. この設問は, 日本精神神経学会が 1995 年に ICD-10 (国際疾病分類第 10 版) の基準に照らし, 「同性愛 (同性に対する性的指向)」を「精神異常」とみなさないという判断に基づき設置し, ここでの正解は「正しくない」である. 結果, 本調査の正解率は 73% であり, これは全国調査の正解率の平均である 55% と比較すると 1.3 倍の正答率である. 他方, 全国調査の学歴別での正答割合と比較すると「短大・高専卒」の正答率 70%, 「大学・大学院卒」の正答率 69% と同程度の結果となっている.

問 7 は, 性同一性障害に関する客観的知識を測るための「日本では, 戸籍上の性別を変えることができる」という項目である. これについては, 2003 年に成立し, 2004 年から施行されている「性同一性障害特例法」における事実可依拠している. よって, ここでの正解は「正しい」であり, 本調査の正答率は 62% となる. これは全国調査の正解率の 30% と比較して 2 倍程度高い結果であり, さらに全国調査の学歴別での正答割合においても「短大・高専卒」の正答率 38%, 「大学・大学院卒」の正答率 38% と比較してもかなり高い結果となっている (図 1).

問 8 として, 「あなたは, 同性愛, 性別を変えた人, 性同一性障害などについて正しい知識を身に付けたいと思いますか」と, セクシュアル・マイノリティについて正しい知識を身に付けたいかどうか, 学生の知識習得への意欲についても聞いている. 正しい知識の習得に関しては「とてもそう思う」「そう思う」の回答は, 合計で 77% であり, 正しい知識習得への意欲は全体の四分之三を超えている (図 2).

#### 2) 情報の取得と共有する相手

セクシュアル・マイノリティに関する情報の取得に関しては, 問 3. 「あなたは, テレビ, 新聞, 書籍, 雑誌, ラジオ, マンガ, インターネットなどで, 同性愛, 性別を変えた, 性同一性障害などが扱

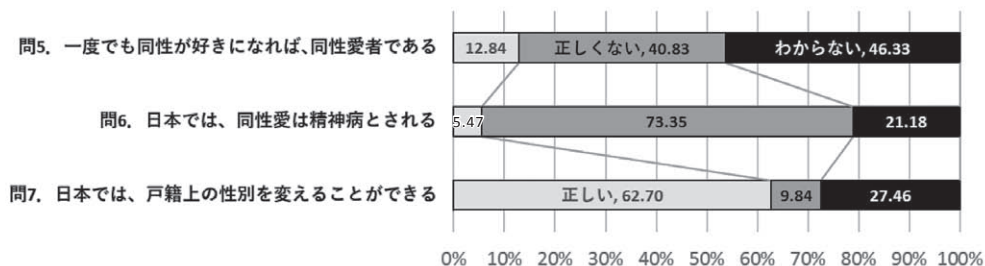


図 1

問8. あなたは、同性愛、性別を変えた人、性同一障害などについて正しい知識を身につけたいと思いますか

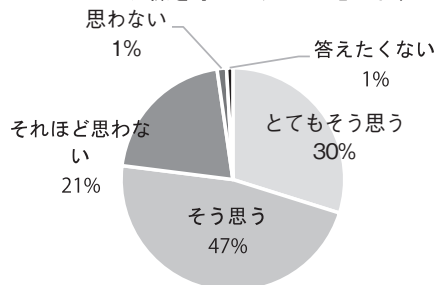


図 2

問3. メディアでセクシュアル・マイノリティを見聞きしたか

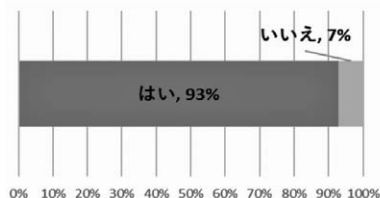


図 3

問4-1. セクシュアル・マイノリティを見聞きしたメディア、テレビ報道

問4-2. セクシュアル・マイノリティを見聞きしたメディア、テレビ娯楽

問4-3. セクシュアル・マイノリティを見聞きしたメディア、テレビドラマ、映画

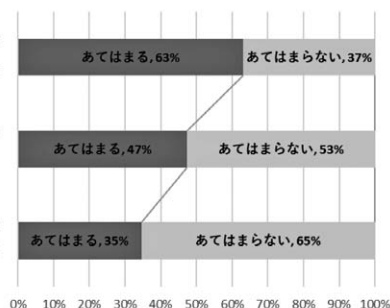


図 4

われているのを見聞きしたりしたことがありますか」, 問4. 「(問3で「はい」と答えた方のみ回答してください.) それはどのようなものですか. (複数回答可)」について聞いた.

結果として, 「メディアで見聞きしている」割合は約9割(93%)であった. これは全国調査とほぼ同程度である(図3).

問4では, 問3で「はい」と答えた407人(総数の93%)について, セクシュアル・マイノリティについて見聞きしたメディアについて聞いた(複数回答可). 複数回答の中で, 問3で「はい」と答えた407人中, 最も多く見聞きされていたメディアは, 「テレビ(報道・教養番組)」227人(68%), 「テレビ(娯楽番組)」208人(51%), 「テレビドラマ・映画」152人(37%)の順となる. 次いで, 「女性マンガ」91人(22%), 「新聞・書籍」83人(20%), 「メール・ウェブ」79人(19%)となる. 「雑誌」27人(7%)や「ラジオ」5人(1%)での見聞き割合は10%に満たない(図4).

情報を共有する相手については, 問2. 「あなた

がこれまでにセクシュアル・マイノリティに関して話をしたことがある人は誰ですか. (複数回答可)」において聞いている. 本調査では, 複数回答の中で最も多い回答は「友人」202人(46%), 次いで「いない」177人(40%), 「母親」119人(27%)の順となっている. 全体としては, 「友人」以外では, 40%が「いない」と答えている点が特徴的である(図5).

### 3) 存在の認識

メディアでセクシュアル・マイノリティについて見聞きしたことがある人は9割いるが, ここでは, 問1として, 「あなたの近い友人や知人, 親戚や家族など身近な方に同性愛, 性別を変えた, あるいはそうしようとしている人, 性同一性障害などはいいますか」と実際に周りにセクシュアル・マイノリティがいるかどうかについて聞いている.

結果, 12%が「いる」と答え, 6%が「そうかもしれない人がある」と答えている(図6).

これは, 2015年に電通ダイバーシティ・ラボが全国69,989名を対象に行ったセクシュアル・マイ

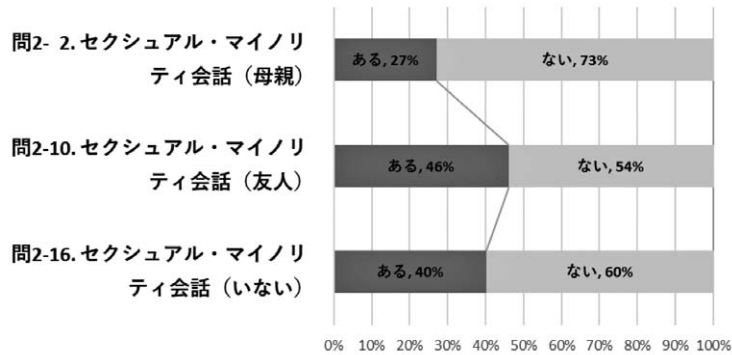


図 5

ノリティに関する広範な調査の、「セクシュアル・マイノリティに該当する人は7.6%」という報告と比較しても、かなり高い認識率である。このことについて、2012年に電通総研は、「セクシュアル・マイノリティに該当する人が全体の5.2%」とする調査結果を発表していることから、セクシュアル・マイノリティの存在の認識率は、調査実施ごとに増加傾向にあることが推測される。それゆえ本研究の数値の解釈については、それが2016年の若者層の意識調査であることを考え合わせると、純粋に「高い認識率」なのか、それとも時代効果および年齢効果なのか注意が必要である<sup>4)</sup>。

#### 4) 身近な人に対する感情

身近な人に対する感情として、問10-1、問10-2、問10-3において「あなたの知人」、「同じ大学の人」、「あなたのきょうだい」がセクシュアル・マイノリティだった場合の気持ちについて聞いた。「あなたの知人」、「同じ大学の人」に関しては、「嫌ではない」、「どちらかという嫌ではない」の合計は共に8割(82, 80%)となるが、「あなたのきょうだい」では、「嫌ではない」34%、「どちらかという嫌ではない」17%とその合計は5割と低くなり、「どちらかという嫌である」28%、「嫌だ」17%の否定的な感情の割合の合計が5割近くとなり高くなる傾向にある。これは、関係が近いほど、嫌悪感を示す人が多いことを示し、全国調査の類似の設問と同じ回答の傾向である(図7)。

#### 5) 友人からのカミング・アウト

同性と異性の仲の良い友人それぞれにについて、「同性愛者」であるとカミング・アウトされた場合にどのような態度をとるかを3つまで選択しても

#### 問1.身近にセクシュアル・マイノリティはいるか

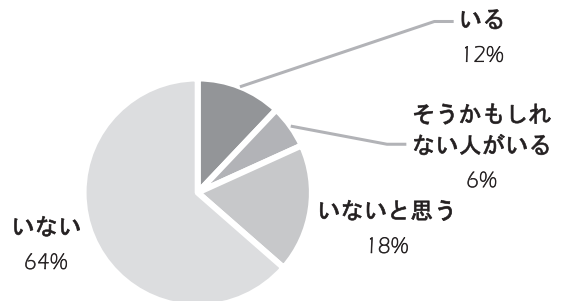


図 6

らった(問11, 問12)。

問11では、仲の良い同性の友人について聞いており、3つまで選択した中で最も割合の多い回答は、「理解したい」291人(66%)、次いで「言ってくれてうれしい」217人(49%)となる。これ以降は「興味が出てくる」54人(12%)、「寄り添いたい」42人(10%)と、1割台となり低くなる傾向にある(図8)。

問12では、仲の良い異性の友人について聞いており、3つまで選択した中で最も割合の多い回答は、「理解したい」305人(70%)、次いで「言ってくれてうれしい」202人(46%)となる。これ以降は「興味が出てくる」61人(14%)、「寄り添いたい」46人(11%)となり、1割台となり低くなる傾向にある(図9)。

まとめると7割近く(同性の友人:66%, 異性の友人:70%)が「理解したい」と答え、5割近く(同性の友人:49%, 異性の友人:46%)が「言ってくれてうれしい」と答えている。この全体的な傾向は全国調査の傾向と同じである。



性的マイノリティに対する調査研究

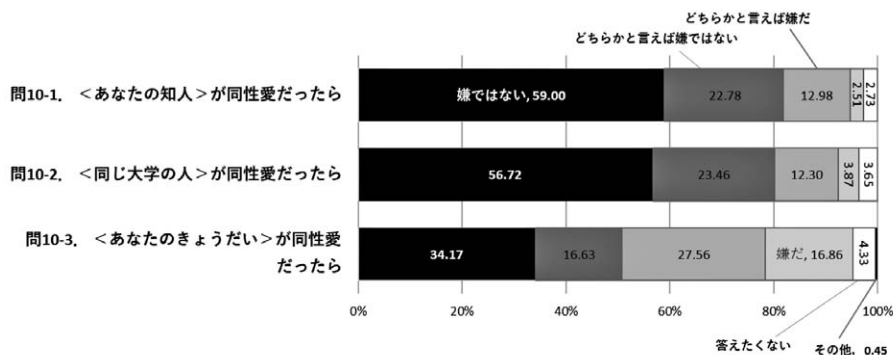


図 7

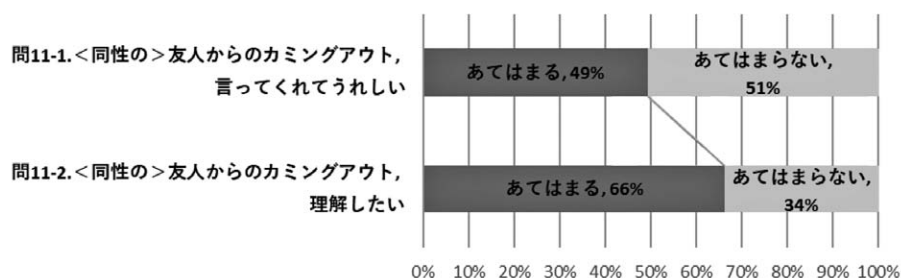


図 8

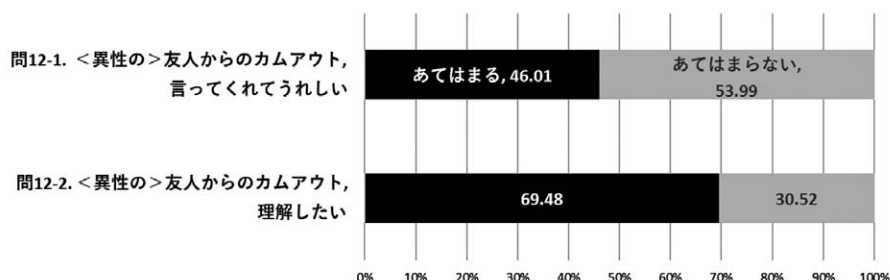


図 9

## 6) 同性婚の見解

本調査では、「同性どうしの結婚を法で認めること」についての見解を問9において複数回答の形式にて聞いている。設問は全国調査において実施されたものを採用した。

選択肢ごとの集計結果を多い割合から順に示すと、「誰にも平等に、結婚する権利がある」277人(63%),「愛し合っていればよい」227人(52%),「海外で認められているから、日本でもあってよい」142人(32%),「生殖にむすびつかないから好ましくない」21人(5%),「伝統的な家族のあり方が失

われる」13人(3%),「海外ではあり得るかもしれないが、日本の社会にはそぐわない」13人(3%),「その他」1人(0.2%),「答えたくない」3人(1%)であった。回答を「愛し合っていればよい」、「誰にも平等に、結婚する権利がある」、「海外で認められているから、日本でもあってよい」との肯定的な見解と「伝統的な家族のあり方が失われる」、「生殖にむすびつかないから好ましくない」、「海外ではあり得るかもしれないが、日本の社会にはそぐわない」との否定的な見解と2分した場合には、同性婚において肯定的な見解が否定的な見解の11倍も高い傾



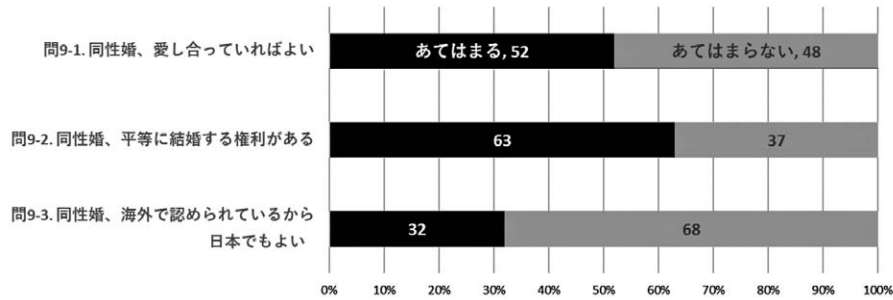


図 10

向にあり、肯定的な見解が多い傾向は全国調査と同じである。また、全般的に女性の方が肯定的な見解を示す傾向にあり、これも全国調査と同じ傾向であった（図 10）。

#### 7) 単純集計のまとめ

以上から、本調査から出てくる特徴についてまとめると、①正しい知識を有している割合が高いこと、②実際に周りにセクシュアル・マイノリティがいると認識している割合が高いこと、の2点が挙げられる。

すでに正しい知識を有している割合が高いが、77%が正しい知識を身に付けたいとの意欲を示していること、実際に周りにセクシュアル・マイノリティの存在を認識している状況からも、セクシュアル・マイノリティに関して学べる環境が求められる。

#### 2. ジェンダー別のクロス集計

ここではセクシュアル・マイノリティに対する意識や態度についてジェンダー的な差異を明らかにしていく。

若者の規範意識のジェンダー差に関する先行研究によると、全体的に見て一般的な傾向は男性よりも女性の方が規範遵守的であると指摘されている<sup>6,7)</sup>。しかし、その一方でジェンダー規範に関わるものごとについては、旧来の考え方に対して女性の方がより距離をとる傾向がみられる。たとえば内閣府男女共同参画室の平成 28 年度の世論調査<sup>8)</sup>では「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対して、男性は 44.7%が賛成であるのに対し、女性の賛成は 37%（反対は男性 49.4%，女性 58.5%）となっている。また、この傾向はセクシュアル・マイノリティに対する態度にも見られ、全国調査のみならず、これまで実施されてきた調査では

セクシュアル・マイノリティに対する嫌悪感は女性よりも男性に多くみられることが指摘されている<sup>3)</sup>。これらの結果についてその説明で多く言及されるのが、ジェンダーの非対称性である。われわれの社会は性別によって異なる規範を要請しており、多くの場合それは女性に対して抑圧的に作用している。このことが女性に対しジェンダー規範を強く意識させ、結果として規範を相対化する方向に作用しているとするものがジェンダーの非対称性による説明の論旨である。

本研究では設問に対し、どのような回答にジェンダー差が現れるだろうか。ここでは＜戸籍上の性別＞と各質問項目のクロス集計を検討する。

集計結果にカイ 2 乗検定を行い、Fisher の直接法における正確有意確率（片側）で 5%未満の水準で＜戸籍上の性別＞による有意差のあった結果は以下の通りである（図 11）。

友人知人の中でこれまで「セクシュアル・マイノリティについて話をしたことがある相手」（問 2）については、その回答のうち「母親」と「いない」において有意差がみられた。「母親」と会話経験があるのは女性に多く、会話する相手が「いない」と回答したのは男性が多かった。他方で、「父親」や「友人」など 15 項目では有意差がみられなかった（図 12, 13）。

セクシュアル・マイノリティが扱われている「メディアに対する認知」（問 4）としては、13 項目のうち「女性マンガ」と「男性マンガ」のみに有意差がみられた。それぞれ「女性マンガ」には女性が「男性マンガ」には男性が多いという常識的な結果となっている（図 14, 15）。

「同性同士の結婚に対する態度および理由」（問 9）

性的マイノリティに対する調査研究

セクシュアル・マイノリティ	母親	男 < 女
に関する会話の相手 (問 2)	いない	男 > 女
セクシュアル・マイノリティ	女性マンガ	男 < 女
を見聞きしたメディア (問 4)	男性マンガ	男 > 女
同性婚を認めるか (問 9)	肯定 誰でも結婚は権利	男 < 女
	否定 生殖に結びつかない	男 > 女
同性の友人からのカミング・アウトを受けた気持ち (問 11)	言ってくれてうれしい	男 < 女
	理解したい	男 < 女
	同情する	男 > 女
	興味出てくる	男 > 女
異性の友人からのカミング・アウトを受けた気持ち (問 12)	言ってくれてうれしい	男 < 女
	どうでもいい	男 > 女
知人が同性愛だったら (問 10-1)		肯定的 男 < 女

図 11

		問2-2会話の相手(母親)		
		ない	ある	合計
性別	男性	109 (79.6)	28 (20.4)	137
	女性	209 (69.7)	91 (30.3)	300

(有意確率=.019)

図 12

については8項目中2項目で有意差がみられた。同性婚を「誰にも平等に、結婚する権利がある」という理由で賛成する項目では、女性の67.3%が同意したのに対し、男性は54.7%であり、結婚の権利の平等に依拠して賛成するのは女性に多くみられた。他方「生殖に結びつかないから」という理由で「好ましくない」という意見に賛同したのは女性の3.3%、男性の8.0%であり、全体の割合は少ないが、否定的な見解について生物学的な理由に言及するのは男性が多いという結果となった(図16, 17)。

「知人や学友が同性愛だったら嫌か」(問10-1)という項目では「知人が同性愛だったら嫌か」という質問のみ男女間に有意差がみられた。「嫌ではない」と「どちらかといえば嫌ではない」を「肯定的」とまとめ、「どちらかといえば嫌だ」と「嫌だ」を

		会話の相手 (いない)		
		ない	ある	合計
性別	男性	68 (49.6)	69 (50.4)	137
	女性	193 (64.3)	107 (35.7)	300

(.003)

図 13

		見聞きしたメディア, 女性マンガ		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	120 (87.6)	17 (12.4)	137
	女性	226 (75.3)	74 (24.7)	300

(.002)

図 14

		見聞きしたメディア, 男性マンガ		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	110 (80.3)	27 (19.7)	137
	女性	283 (94.3)	17 (5.7)	300

(.000)

図 15

		同性婚, 平等に結婚する権利がある		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	62 (45.3)	75 (54.7)	137
	女性	98 (32.7)	202 (67.3)	300

(.008)

図 16

「否定的」とまとめた結果,「肯定的」な男性が75.2%であったのに対し, 女性は85.0%であった(図18)。

「同性の友人から<同性愛者である>とカミング・アウトされた場合の気持ち」(問11)では, 15項目中4項目で有意差がみられた。「言ってくれてうれしい」と「理解したい」の2項目では女性が,「同情する」「興味が出てくる」の2項目では男性が多数となり, 女性が共感的な傾向を示す一方, 男性の場合は同情や興味など対象者から距離を置いたうえで外側からの関心を想起させる(図19, 20, 21, 22)。

他方,「異性の友人からのカミング・アウト」(問12)に対しては, 16項目中「言ってくれてうれしい」と「どうでもいい」の2項目に有意差がみられた。「言ってくれてうれしい」では女性が,「どうでもいい」では男性が多く同意し, ここでも女性の共感的傾向,

		同性婚，生殖に結びつかないから好ましくない		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	126 (92.0)	11 (8.0)	137
	女性	290 (96.7)	10 (3.3)	300

(.033)

図 17

		<同性の>友人からのカムアウト，同情する		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	126 (92.0)	11 (8.0)	137
	女性	294 (98.0)	6 (2.0)	300

(.004)

図 21

		知人が同性愛だったら			
		肯定的	否定的	その他	合計
性別	男性	103 (75.2)	30 (21.9)	4 (2.9)	137
	女性	255 (85.0)	38 (12.7)	7 (2.3)	300

(.041)

図 18

		<同性の>友人からのカムアウト，興味が出てくる		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	114 (83.2)	23 (16.8)	137
	女性	269 (89.7)	31 (10.3)	300

(.043)

図 22

		<同性の>友人からのカムアウト，言ってくれてうれしい		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	81 (59.1)	56 (40.9)	137
	女性	140 (46.7)	160 (53.3)	300

(.010)

図 19

		<異性の>友人からのカムアウト，言ってくれてうれしい		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	87 (63.5)	50 (36.5)	137
	女性	149 (49.7)	151 (50.3)	300

(.005)

図 23

		<同性の>友人からのカムアウト，理解したい		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	56 (40.9)	81 (59.1)	137
	女性	91 (30.3)	209 (69.7)	300

(.021)

図 20

		<異性の>友人からのカムアウト，どうでもいい		
		あてはまらない	あてはまる	合計
性別	男性	123 (89.8)	14 (10.2)	137
	女性	288 (96.0)	12 (4.0)	300

(.012)

図 24

男性の距離を置く傾向が見て取れる（図 23，24）。

以上，＜戸籍上の性別＞に関して有意差がみられた項目に注目してきたが，全体的に見られる特徴としては男子に保守的，女子に平等主義的な傾向がみられることである。女子は同性婚を肯定する場合，その根拠に平等の観点を指摘する点が特徴的であり，他方男子の場合は生殖に結びつかないことを根拠に好ましくないとする点が特徴的である。友人からのカミング・アウトに対しても女子が「言ってくれてうれしい」「理解したい」と共感的態度を示すのに対し，男子は「同情」や「興味」さらには「どうでもいい」とする態度を示している。これらは概ね先行研究の知見を支持するものと言えるだろう。

他方で，本研究では先行研究とは異なる興味深い知見も見られる。それは男女ともに見られる態度や価値観の「健全さ」である。たとえば全国調査（回

答者：20～30代）では「仲の良い同性から＜同性愛者＞だと告げられたらどう思うか」の問いにおいて，「気持ち悪い」については男性の9.4%，女性の4.3%が同意しているのに対し，本調査では同様の問いに対し男性3.6%，女性1.3%となっている。同じく「身の危険を感じる」は男性5.1%，女性4.7%（全国調査；男性17.3%，女性9.2%）と半分程度となっている。また「同じ大学の人が同性愛だったらどう思うか」の問いに対しても否定的なのは男性21.2%，女性14.0%で，こちらも「同僚が同性愛だったらどう思うか」という全国調査の28.0%（性別データなし）に比べて少ない。

もちろん，本調査と全国調査では年齢区分が完全には一致せず，またサンプリングの方法も異なるため，両者の数値の解釈には注意が必要となる。しかし，セクシュアル・マイノリティに対する嫌悪や偏

見に関して示された大きな差は、本研究の対象者の意識の「健全さ」を示している。さらに本調査の対象者がセクシュアル・マイノリティに関する客観的な知識量が豊富であることと考え合わせると、本研究の結果は意識や態度と客観的知識量との関係性の存在をも示唆するものとなっている。

### 考 察

本研究は急速に認知度を高めているセクシュアル・マイノリティに対する若者意識を、その意識や態度に照準を合わせて実態を明らかにしてきた。そこで明らかになったことの概略は以下の通りである。

先行研究として参照した釜野さおりらの「性的マイノリティについての全国調査」と比べて、セクシュアル・マイノリティに対する客観的知識の量は高得点（＝豊富）であった。これは対象者全員が高学歴（現役大学生）であることに加え、医療系に在籍しているため本来的な興味関心事項とセクシュアル・マイノリティについての関心との親和性が高いことが理由として考えられる。

また、意識や態度についてのジェンダー差は「同性婚に対する態度」「友人からカムアウトされた時の心情」「知人が同性愛であった場合の意識」について有意差がみられた。これらの傾向から、女子学生が平等志向、共感的な特徴を示すのに対し、男子学生は興味本位やセクシュアル・マイノリティに対する否定的態度を示すことがわかる。これはこれまでの知見の示すところと同様の結果である。

その一方で質問項目の多くにおいては男女の有意差がみられず、むしろ類似の傾向を示し、その特徴は全国調査に比べて平等志向、共感的な態度を強く示している。全国調査に比べて、知識量が豊富で確実であることや男女差が少なく平等志向、共感的態度に偏っていることは、調査対象者が入学時点で当該テーマに関する知識の水準が高いレベルでそろっており、それが学部や性別にかかわらず差別的な態度や偏見から距離をとることを可能にしていると推測させる。これは学部の違い（将来の職業的志向）や性別などの属性よりも客観的な知識量が意識や態度に関係していることを示すものである。

今回の暫定的結果が示唆するのは、教育や啓発活動の可能性である。態度や偏見が知識量に影響を受けるならば、学校による教育や組織的な啓発活動が

問題の克服に道を開きうることになる。男女を問わず平等志向が強い現状はこの可能性を後押しするものとなろう。また、本調査において、「セクシュアル・マイノリティに対する正しい知識を身につけたいか」との質問に対し、77%もの学生が肯定的な回答を寄せていることも上記知見を支持するものとなっている。

本研究は調査対象を医療系総合大学の一年生に絞っているため、サンプルとしての狭さには十分留意すべきであり、これをもって若者意識全体ととらえることについては注意しなければならない。しかし他方で、ほぼ全員が将来医療職を志している点はある種の将来像の予見には役立つ。セクシュアル・マイノリティに関する諸問題は、それが深刻化して治療を求める場合に限らず、自らの身体的な状況を理解するために参照するべき知識を取得する際にも医療とのかかわりは不可欠であり、医療従事者が直接、間接的にかかわってくることは避けられない。本研究は将来の医療従事者となる若者の意識を明らかにしている点で、将来の医療従事者が性的な多様性に対して一層理解ある姿勢を保持することを予測させる。このことはセクシュアル・マイノリティの問題の軽減や解決としては望ましい傾向である。また、そのための要件が「正しい知識」の習得であるということも重要である。セクシュアル・マイノリティに対する意識や態度の改善は、医療従事者に限らず、一般的にみても教育や啓発活動に左右されることが示唆されているからだ。

本研究ではもう一点注意すべき点がある。それは大学での調査という制約上、授業の合間の休み時間にアンケートを実施している点である。これにより意図せざる結果として授業内容からの「キャリアオーバー」効果がもたらされる危険性が生じる。今回のアンケートは人文社会系の必修科目の授業後に実施された。その日の授業内容は「差別問題」であった。当然学生の中には差別や人権について意識が覚醒され、それがアンケートに反映された可能性は考えられる。この調査は2017、18年度とあと2回の調査が予定されている。次回アンケートは異なる対象者への実施となり、データを比較検討することも必須の課題となる。

謝辞 本調査および研究の実施に際しては、「昭和大学富



士吉田教育部の共同研究費」より研究支援を受けている。  
ここに謝意を記す。

#### 利益相反

本研究に関し、開示すべき利益相反はない。

#### 文 献

- 1) Bauerlein V. トランスジェンダーのトイレ問題, 全米で論争. *Wall Str J* (Internet). 北米版. 日本語版. 2016年3月25日. (2016年4月27日アクセス) <http://jp.wsj.com/articles/-1458893704?tesla=y>
- 2) 虹色ダイバーシティ, LIXIL. 性的マイノリティのトイレ問題に関するWEB調査結果. 2016年11月18日資料改訂. (2016年4月27日アクセス) [http://newsrelease.lixil.co.jp/user\\_images/2016/pdf/nr0408\\_01\\_01.pdf](http://newsrelease.lixil.co.jp/user_images/2016/pdf/nr0408_01_01.pdf)
- 3) 釜野さおり, 石田 仁, 風間 孝, ほか. 性的マイノリティについての意識 2015年全国調査報告書. 科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」. 2016. (2017年3月7日アクセス) <http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf>
- 4) 電通ダイバーシティ・ラボコミュニケーション
- 広報部. 電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT調査2015」を実施 LGBT市場規模を約5.9兆円と算出. 2015年4月23日. (Internet). (2017年3月7日アクセス) <http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html>
- 5) 釜野さおり, 石田 仁, 風間 孝, ほか. 性的マイノリティについての意識, 2015年全国調査発表会資料. 2016年6月. 2016.
- 6) 梅澤秀監. 規範意識と逸脱行動についての分析. 青少年人間関係調査研究会. 青少年の人間関係に関する調査研究報告書. 平成13年度社会安全研究財団助成調査研究報告書. 2001. pp54-63.
- 7) 芝山明義, 岩永 定, 柏木智子, ほか. 子どもの規範意識と規範行動の実態に関する研究 影響を及ぼす要因としての学校と地域の連携に着目して. 鳴門教大研究紀要. 2014;29:111-121.
- 8) 内閣府男女共同参画局. 男女共同参画社会に関する世論調査. 2016年9月. (2016年5月2日アクセス) <http://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-danjo/index.html>
- 9) 井上輝子. 女性学への招待 変わる / 変わらない女の一生. 新版. 東京: 有斐閣; 1997. pp13-32.

性的マイノリティに対する調査研究

(添付資料) 質問文と回答別割合 (%)

<p>問 1. 「あなたの近い友人や知人、親戚や家族など身近な方に同性愛、性別を変えた、あるいはそうしようとしている人、性同一性障害などはいますか」</p> <p>・ いる [12%], そうかもしれない人がある [6%], いないと思う [18%], いない [64%]</p>
<p>問 2. 「あなたがこれまでにセクシュアル・マイノリティに関して話をしたことがある人は誰ですか」*複数回答可</p> <p>・ 父親 [8%], 母親 [27%], 祖父 [1%], 祖母 [2%], 兄 [1%], 姉 [5%], 弟 [2%], 妹 [3%], その他の親戚 [0%], 友人 [46%], 恋人 [3%], アルバイト同僚 [2%], 教師 [5%], クラブ顧問 [1%], その他 [2%], いない [40%], 答えたくない [0%]</p>
<p>問 3. 「あなたは、テレビ、新聞、書籍、雑誌、ラジオ、マンガ、インターネットなどで、同性愛、性別を変えた、性同一性障害などが扱われているのを見聞きしたりしたことがありますか」</p> <p>・ はい [93%], いいえ [7%], 答えたくない [0%]</p>
<p>問 4. 「(問 3 で「はい」と答えた方のみ回答してください。) それはどのようなものですか」*複数回答可</p> <p>・ テレビ (報道・教養番組) [68%], テレビ (娯楽番組) [51%], テレビ (ドラマ・映画) [37%], 新聞・書籍 [20%], 雑誌 [7%], ラジオ [1%], 女性向けマンガ・コミック [22%], 男性向けマンガ・コミック [11%], インターネット (メール・ウェブなど) [19%], インターネット (フェイスブック, ツイッター, LINE など) [16%], その他 [0%], 答えたくない [1%]</p>
<p>問 5. 「一度でも同性が好きになれば、同性愛である」(正解:「正しくない」)</p> <p>・ 正しい [13%], 正しくない [41%], わからない [46%], 答えたくない [1%]</p>
<p>問 6. 「日本では同性愛は精神病とされる」(正解:「正しくない」)</p> <p>・ 正しい [6%], 正しくない [73%], わからない [21%], 答えたくない [0%]</p>
<p>問 7. 「日本では、戸籍上の性別を変えることができる」(正解:「正しい」)</p> <p>・ 正しい [62%], 正しくない [10%], わからない [27%], 答えたくない [1%]</p>
<p>問 8. 「あなたは、同性愛、性別を変えた方、性同一性障害などについて正しい知識を身につけたいと思いますか」</p> <p>・ とてもそう思う [30%], そう思う [47%], それほど思わない [21%], まったくそう思わない [1%], 答えたくない [1%]</p>
<p>問 9. 「同性どうしの結婚を法で認めるかどうかについて、さまざまな意見がありますが、あなたはどのように思いますか。あなたのお気持ちやお考えに当てはまるものに、いくつでもチェックを入れてください」*複数回答可</p> <p>・ 愛し合っていればよい [52%], 誰にも平等に、結婚する権利がある [63%], 海外で認められているから、日本でもあってよい [32%], 伝統的な家族のあり方が失われる [3%], 生殖にむずびつかないから好ましくない [5%], 海外ではあり得るかもしれないが、日本の社会にはそぐわない [3%], その他 [2%], 答えたくない [1%]</p>
<p>問 10-1. 「〈あなたの知人〉が同性愛だったら、あなたはどのように思いますか。あなたのお気持ちにもっとも近いものを 1 つ選んで、チェックを入れてください」</p> <p>・ 嫌ではない [59%], どちらかという嫌ではない [23%], どちらかといえば嫌だ [13%], 嫌だ [3%], その他 [0%], 答えたくない [3%]</p>
<p>問 10-2. 「〈同じ大学の人〉が同性愛だったら、あなたはどのように思いますか。あなたのお気持ちにもっとも近いものを 1 つ選んで、チェックを入れてください」</p> <p>・ 嫌ではない [57%], どちらかという嫌ではない [24%], どちらかといえば嫌だ [12%], 嫌だ [4%], その他 [0%], 答えたくない [4%]</p>
<p>問 10-3. 「〈あなたのきょうだい〉が同性愛だったら、あなたはどのように思いますか。あなたのお気持ちにもっとも近いものを 1 つ選んで、チェックを入れてください」</p> <p>・ 嫌ではない [34%], どちらかという嫌ではない [17%], どちらかという嫌だ [28%], 嫌だ [17%], その他 [1%], 答えたくない [4%]</p>

問 11. 「あなたが仮に、仲の良い〈同性の〉友人から「同性愛者」であると告げられたとしたら（カミング・アウトされたとしたら）、どのような気持ちになると思いますか」\*選択肢から3つまで選ぶ

・ 言ってくれてうれしい [49%], 理解したい [66%], かわいそう [1%], 同情する [4%], 興味が出てくる [12%], 寄り添いたい [10%], 身の危険を感じる [5%], 気持ち悪い [2%], 迷惑だ [1%], 大変なことになった [6%], 自分なら治してあげられる [0%], 聞かなかったことにしたい [4%], どうでもいい [6%], その他 [2%], 答えたくない [2%].

問 12. 「あなたが仮に、仲の良い〈異性の〉友人から「同性愛者」であると告げられたとしたら（カミング・アウトされたとしたら）、どのような気持ちになると思いますか」\*選択肢から3つまで選ぶ

・ 言ってくれてうれしい [46%], 理解したい [70%], かわいそう [1%], 同情する [4%], 興味が出てくる [14%], 寄り添いたい [11%], 身の危険を感じる [2%], 気持ち悪い [2%], 迷惑だ [1%], 大変なことになった [6%], 自分なら治してあげられる [1%], 聞かなかったことにしたい [2%], どうでもいい [6%], その他 [0.2%], 答えたくない [2%]

(調査協力をいただいた A 大学との取り決めにより、項目を一部削除しています)

THE AWARENESS AND BEHAVIOR OF UNIVERSITY STUDENTS  
TOWARD SEXUAL MINORITY : Part 1  
— A RESEARCH STUDY THROUGH AN ONLINE SURVEY —

Fumio SUNAGA, Hiroshi OGURA,  
Hiroyuki HORIKAWA and Norimitsu KURATA

College of Arts and Sciences, Showa University

Keiko MASAKI

College of Arts and Sciences, Showa University students' counselor

**Abstract** — The purpose of this study was to clarify characteristic attitudes of young people, ranging from ages 18 to early twenties, towards sexual minorities. The relationship between the cognitive awareness of sexual minorities among young people and their characteristic attitudes was also investigated. We conducted a questionnaire survey among the 439 first year students (males 137, females 300, na 2) of A University to gather information using an online questionnaire system in order to preserve participants' privacy and to yield a high response rate. To obtain reliable results, we referred to the research report of Kamano *et al* ["National questionnaire survey on attitudes towards sexual minority" (2016)], with which our data were compared in order to assess the characteristic attitudes of young people in relation to other age groups. The survey results indicated that our participants have greater awareness and better knowledge of sexual minorities than those of the national questionnaire survey. It also shows that our participants have higher tendencies to avoid discrimination against sexual minority. These results can be interpreted to be due to the higher educational backgrounds of our participants. Another factor that differentiates our participants and can influence the results is the fact that their majors are related to healthcare. Based on the characteristics of our participants, our results cannot be generalized to represent the characteristics of typical young people in a straightforward manner. However, we believe our results might be considered to foresee the future, when the knowledge of healthcare is spread throughout the society. This is the first report of this study which extends over three years in which the survey of the first-year students of A University will be conducted every year.

**Key words:** sexual minority, cognitive awareness, gender bias

〔受付：5月11日，受理：6月12日，2017〕